

第25回 BOX-AiR新人賞受賞!

「英雄」解体



第二話 退役英雄

著 小山恭平
Illustration = 風乃

小山恭平——Kyohhei Oyama

本作で第25回BOX-AIR新人賞を受賞、デビュー。

風乃——Kazeno

イラストレーター。ゲームなどの仕事で主に活動する傍ら、「BOX-AIR アニメイララストコンテスト2013」にて「AIR 賞」と「スターチャイルド賞」の2部門をダブル受賞する。

「風の欠片」<http://kazenokakera.tumblr.com/>

1

「飛鳥ひちょう尽きて良弓りょうきゅう蔵れ、狡兔こうと死して走狗そうく——」

あれ、続きは何だっけ、と山田やまだ烏鷺うろは首を傾げる。すばしっこい兎うが死ぬと、狗いぬはどうなるんだっけ？

ニコチン吸えば思い出すかな、と最近お気に入りたばこのベネズエラ産の煙草を取り出す。

「ここは禁煙ですよ」

嫌味な眼鏡めがねにピンツと指ではじかれ、口にくわえた心の糧かては部屋の隅に転がった。「ひどい事をする眼鏡だね」

「ひどいのはあなたのモラルだ」

「嫌味な眼鏡だ」

「眼鏡はみんな嫌味です」

「さすがにそこまで言う気はないよ」烏鷺さびは寂しい口元を触りながら、モニターへ目をやった。

映し出されているのは、この向かいの部屋だ。四方の壁と天井は病的なくらいに真っ白なのに、床は異様な紋様で埋められている。悪魔崇拝のカルトが儀式につかいそうな部屋だが、そこにおいでになるのは、悪魔とは遠く遠く離れた存在だ。

「そろそろ来るようです」

「そうだね」

カタカタとキーボードを叩き出す眼鏡。それに合わせ、床の紋様が歪む。ゆらゆら揺れる線の上から黒カビのような何かが生み出され、宙空に集まっっていく。

「集約成功！ 転移開始10秒前！ 9！ 8！」

「いつ見てもわざとらしいよね。そんなに声張り上げる必要あるの？」

「烏鷺さんがうるさい事以外は順調です！ よし！ 開きます！」

黒い塊かたまりの中央に光が灯る。光は次第に拡大し、黒は光にの

まれた。

「射出行きます！」

よく通る眼鏡の声がつつとうしくて、烏鷺は耳をふさいだ。この神々しい瞬間を、誰にも邪魔されなくなかった。

白い光がモニターを覆う。強いのに、見る者の目を痛めない不思議な光だ。

「成功です！」

光が消えると、モニター上の部屋には一人の少女が出現していた。

赤い衣服、長い黒髪、強い意志と少しの弱さを宿した眼――
壮麗な少女だ。きつとジャンヌ・ダルクもこういう少女だった

のだろうな、と烏鷺は思った。

「私の役目は終わりました」眼鏡は眼鏡をつけたまま眉根まゆねを揉もむ。「次はあなただ。どうか彼女を、この世界になじませてあげて下さい」

真剣な声。ここ半年間、彼女をこの世界に呼び戻すのに尽力した彼は、きつと親のような気分になっているのだろう。眼鏡は少し、感情移入し過ぎる。

「はいはい、了解したよ。仕事だからね」

モニタリングルームを出て、烏鷺は少女の出現した部屋へと向かう。

「あ、そうだ」

唐突に、烏鷺はあの言葉の続きを思い出す。

「狡兎死して——走狗烹^にらる、だ」

意味は、そう、

——用済みになった英雄は、死ね

「そうならないように僕らがいるんだけどね」などと呟^{つぶや}きな
がら、烏鷺はその部屋の扉を開く。

2

烏鷺の姿を目にした途端、少女は目つきを鋭くし、臨戦態勢をとった。完全に敵扱いだ。まあだいたい合ってる、と烏鷺は

思う。

「こんにちは。どうか落ち着いて」

そう言うと、少女は目を見開いた。言葉の内容に驚いたわけではないだろう。烏鷺が日本語を——地球の言葉を——話した事に驚愕きょうがくしたのだ。

「君、日本語覚えてる？」

「おっぼえて、ますけど……」少女は不審そうに目を眇すがめ、
頷うなずく。

「ああよかった。君が異世界に召還しょうかんされたのは8歳頃って聞いてたから心配してたんだけど、母国語って忘れないものだね」

「いやいや一人で納得しないで欲しいんですけどねえ……なー
んであなたは日本語を話せるんですか」

「なぜ、って」烏鷺は言う。「ごご、日本だし」

「………！　んなまさか！」

「まさかって言われても、本当の事だからなあ。異世界の救済
ご苦労様でした。役目を終えたようだから、君をこっちの世界
に呼び戻した。凱旋がいせん、ってやつ？」

「馬鹿な事言わないで下さいよ！　わたしには向こうでやる事
がまだいっぱい！　あれとかこれとかあれとか……例えば、あ
れとか……」

「いや、もうないよ」いきり立つ彼女に、烏鷺は静かに首を

振った。「英雄は、乱世が終われば用済みだ。あのまま向こうにいたら、君は殺されていた。平和な世界に英雄って邪魔なだけだからね」

「……………！ うりやツ！」

元英雄はそれ以上言葉を重ねる事はなかった。拳こぶしを握り、烏鷺に向かって飛びかかる。

英雄だった頃の彼女なら、烏鷺を組み伏せる事ぐらい、造作もなかっただろう。何せ、英雄なのだから。

だが――

「えいや」

「あうっ!？」

烏鷺はその腕をとり、彼女を壁に押しつける。

「もう君に、あの力はないよ。あれは『英雄』という肩書きに与えられた力だ。君のものじゃない」

烏鷺はにっこり微笑み、そして言う。

「君は今日から一般人だ。ようこそ、普通の世界へ」

3

きっかけとなったのは、15世紀のフランスで起こった、ある乙女の出現だ。

当時死に体だったフランスを、一人の乙女が蘇らせた。

辺鄙^{へんぴ}

な田舎から出てきた乙女ジャンヌ・ラ・ピュセル
れ、わずか10日間で敵を国から追い出した。

乙女は戦後魔女の汚名を着せられ処刑されるが、彼女の成した奇跡の逸話は今日にまで生き続けている。

おとぎ話のような英雄譚^{えいゆうたん}。それはフィクションだろう、と誰もが疑う夢のようなノンフィクション。

誰もが知りたがった。

——ジャンヌはいったい何者だったのだろうか

聖女か魔女か、それともただの少女か。

特に戦中ジャンヌとくつわを並べたフランス元帥^{げんすい}ジル・ド・

レは、共に歩んだ乙女の正体に並々ならぬ興味を抱いた。

彼は私財を投じて調査隊を結成し、聖なる乙女の生地へ向かわせた。村人達は気さくだったが、なぜかジャンヌの話題になると頑かたくなに口を閉ざし、矛盾だらけの逸話を語ってお茶を濁にごした。

それでも執念深く調査を続けた結果、ジャンヌと幼年時代を共に過ごした古老の一人が、ついに真実を語った。

『ジャンヌは幼い頃、空中にあいた穴から出てきたんだ』

『その穴の向こうには、別の世界があるようだった』

調査隊は困惑したが、ひとまず、この老人の証言を真実だと仮定し、長きにわたって調査を続けた。

数世紀をまたいだ調査の結果、以下の事実が明らかとなった。

世界はこの地球の他にも数多あまた存在し、それらの世界は、人材をやり取りしている。

ある世界の歴史が間違つて進もうとしていく時、そしてその世界にはそれを修正できそうな人材がない時、世界は他の世界から適任者を譲り受ける。

大抵は見目みめうるわ麗しい——またはおぞましいほどみにく醜い——少年少女。世界は彼らを幼いうちに呼び込み、その世界に慣れさせる。そしてちようどいい頃合いに英雄としての力を与え——世界を救済させる。

ジャンヌは他の世界から来た人材だったし、地球もしばしば他の世界へと人材を輸出している。

世界は間違いを正してもらえらるし、英雄は英雄として尊敬されるしで、この関係は一見するとWIN—WINだ——それで終わればの話だが。

しかしジャンヌがそうであつたように、用済みになつた英雄は、大抵、殺されてしまう。平和な世界に強大な個人は必要ないのだ。

用済みの英雄達を、なんとか救う事はできないだろうか。偉業を成した人間が、非業ひごうの最期さいごを遂とげるなど、あつてはならない事だ——その願いと共に設立されたのが、烏鷺達の所属する『退役英雄日常回帰補助機関』だ。

その主な業務は二つ。

地球に来た異世界からの英雄を、速^{すみ}やかに元の世界に返却する事。

そして地球出身の英雄を呼び戻し、日常に戻る手伝いをする事。

4

「というわけで、君の担当官の山田烏鷺です。これから君が日常に戻るための補助をさせてもらいます、よろしく」手を差し出すが、華麗にスルーされた。

元英雄は烏鷺の方には目もくれず、黙々と食事を続ける。さすがに箸の使い方は忘れてしまっているようで、握り箸に刺し箸寄せ箸、いろいろやらかしているが、まあ、あとで教えてやればいい。

平屋ながら瀟洒しょうしやな一軒家。その食卓で元英雄としがない男が対座している。なんかシユールな光景だね、などと考えながら、烏鷺は説明を続ける。

「山田カロン、それが君の新しい名前。年齢は地球換算で17歳。しばらくは僕の妹という設定で生活してもらいます。この家は好きに使っていいけど、貸すだけだから壊さないように。僕は隣の家に住んでるから、必要に応じて呼び出して」

異世界から帰還してきた元英雄は、担当官と共に生活しながら、言語や数字、そして地球という世界の在り方を勉強するのだ。

カロンの研修地には青森県の、海に近い田舎町が割り当てられた。人の密集している都会では破天荒はてんこうな元英雄は浮いてしまいうし、それにカロンが元いた異世界は非常に自然の多い場所だったので、それらを加味して選定されたのだ。

「何か、これだけは欲しいってものはあるかな？ 限度はあるけど融通するよ」

「……………」

「ま、話したくないならそれでいいけど、僕の話は聞いとくよ

うに——つてこら、瓶びんをあける時は栓抜き使つて。ほらこれ」
栓抜きを差し出すが、カロンは目もくれない。指で蓋ふたをあけよう
と奮闘中。アホなのだろうか。いや、そうか——

「一応、言っておくけど」烏鷲は言う。「女の子の力じゃあ、指で蓋はあけられないよ。英雄だった頃の君ならともかく、こつちの世界じゃ普通の子だからね、君は」

「なーんでダメだつてわかるう!!」

「あ、やっと口きいたな。なぜつて、そうなってるから。その瓶の蓋を指であけるのに必要な握力はおよそ84キロ。細い女の子にはだせっこない」

至極真つ当な事を言つたつもりだったが、カロンは軽蔑けいべつの目

を烏鷺に向けた。腹立つ顔だが、我慢。

「あなたのようなやからはどこにでもいますよねええ。自分は何もしないくせに、誰かが挑戦しようとする、それは無理だつて笑うんです。こつちが笑つちやいますね、その態度」

「そう、なら続けてみなよ」

「言われるまでもない、つつー……！」

ふぐぐ……、と挑戦を続けるカロンを横目に、烏鷺は煙草に火をつける。漂う紫煙しえんに視界がおぼろになるが、頭は逆にクリアになった。

さあて、このアホの子をどうしますか、と今後に思いを馳はせる。

帰ってきたばかりのカロンはまだ、この地球という世界がどういうものかわかっていない。ここは、厳密な論理の世界だ。斉一性原理及び帰納法的^{きゆうかうほう}世界。世界観ががちがちに固まっている世界なのだ。

地球において、人の出せる力は筋肉の量と骨格に依る。それ以上は、絶対に出ない。そのへんゆるい異世界では人の意志の力で現実がけっこう変動するので、元英雄は地球の窮屈さ^{きゆうくつ}にしばし戸惑う。

どうしてこんなに願っているのに新たな力が目覚めないのか、どうしてこんなに勝つ理由があるのに奇跡が起こらないのだろうか、と。

ましてや、カロンは他の世界で大英雄だったのだ。人を遥か^{はる}り^りよう^{よう}が^が凌駕する力を持つていたのに、いきなりあなたは普通の子です、むしろちよつとアホの子です、なんて言われたって、受け入れられるはずもないだろう。

煙草を次々吸いながら、烏鷺は今後の指導方針を考える。

あ、そうだ、と早速閃^{ひらめ}く。1週間後に、うつつつけのイベントがある。

5

「なーんでわたしがこんならんちき騒ぎに加わらなくちやいけ

ないんですか！」

「失礼な言い方だな。健全な催しだよこれは」

近所の大学で開催された地域の体育祭に、二人は参加していた。快晴の空、はためく万国旗、レジャーシートをひろげる家族連れ——これ以上に健全なイベントがこの世にあるだろうか。

あたりにうごめく元気そうな壮年男女の中で、スパッツ姿の元英雄は戸惑いきよどつているが、まあこれも社会勉強だ。しかしスパッツ似合うなこいつ、とそつと写真を一枚。眼鏡あたりに売りつけよう。

「ええと、この後すぐの成人女性50メートル走にエントリーし
といたから、頑張つてね。列はあっち」

「だからあ！　なんでわたしがこんなあ！　民衆達とお！」

「いや、君も民衆だし」

「違いますうう。あなたは知らないでしょうけど、わたし年3くらいで演説とかしちゃう人間ですから。上に立つ人間なんです！」

「だから、それは昔の話だつてば。」

——ちなみに関係ないけど昨日のうちに高級いわて牛を取り寄せておいたよ。塩胡椒しおこしょうパラつかせてレアで焼いたらおいしいだろうなあ」

「このわたしを食べ物で釣る気ですかふざけやがって侮辱しおじよくやがって大正解ですよちくしょう！　やってやらあ！」

「そうと決まればほらいったいたった。ちやんと準備運動しなよ。わき腹痛くなるから」

背中をぐいぐい押して、とにかくスタート地点の列に並ばせる。ふう、食べ物で釣るだけの重労働だぜ、と烏鷺は額ひたいの汗を拭ぬぐいながら観覧席へ。

パン！パン！と次々銃声が鳴り、列が進む。カロンは出走が近くなっても屈伸くっしんの一つもせず、念入りに準備運動をする周囲を見回していた。なんでこいつら妙な動きを繰り返しているのか、と言わんばかりだ。

まあ、準備という概念がわからないのも無理はない。英雄はいきなり運動しても、わき腹が痛くなったり靱帯じんたいが切れたりし

ない。どんな時でも無条件でパワー全開なのだ。

だが、彼女はもう英雄ではない。カロンはこれから、それを思い知る事になるだろう。人体がどれほどめんどいものなのか、身をもって実感するがいい。

「しっかし……」

あれほどブラをつけると言っただが、背中を触った感じはノーブラだった。完全にスポーツなめてやがる、と烏鷺は思う。

『位置について——』

カロンは見よう見まねで一応スタートの体勢をとる。

『ヨイイ』

しかし全く用意はできていない。

パン！

一拍遅れて、元英雄は走り出す。最初の一步を踏み出した時、カロンはまだ飄々^{ひょうひょう}としていた。なんだこの程度、と。しかし一步二歩と進むうち、その表情がどんどん歪む。

かつてなら、一瞬で駆け抜ける事のできた距離。たったの50メートルが、あまりに長い。驚愕の目、苦悶^{くもん}の口元。

すらりと長い両の脚を必死に交互に動かすが、左右のちよつと太めのおばちゃん達をぶつちぎる事ができない。

カロンの順位は2位だった。6人中の2位である。ごく一般的なおばちゃん達の中での2位である。

「あっはっは」

烏鷺は笑う。わき腹を押さえて苦しそうにしている美女の姿が面白くて仕方がなかった。これで煙草を吸えれば最高だったのだが、と寂しい口元を触る。

肩をいからせこちらに接近してくるカロン。

「あ……あなた（ぜえぜえ……）、いったい（はあはあ……）、わたしになに、を……！（ふうふう……）」

「何って、何も？」

「うそですう！　だつたらこのおなかの痛みは何です！　わたしが寝ている間に何をしましたか正直に白状せいッ！」

「いろいろ誤解を招くから、もうちよつと声下げようか」ご近所で噂になったらどうする。「ええと、まずそのわき腹の痛み

に關しては、君の準備運動不足が原因です。ちなみになぜ痛くなるかというと、そこには脾臓ひぞうという臓器があつてだね、その臓器には血液を蓄たくわえる機能があるんだけど、急に運動すると――

「なーにをわけのわからない事おお！ 何の呪いをかけたか白状しろって言つてんですよこっちはあ！」聞くお耳がないようだった。

呪い、ねえ。そんなものがこの世界にあると、カロンは本気で信じているのだ。

「呪いなんてないよ。この世界にあるのは、理屈と現象だけだ」

「はああ？　呪いが無いなんて、そんなわけ……だったら、どうしてわたしの運動能力はあんなに低下してるってんですか！　わたしの足がどれほど速いか知ってます？　国一と呼ばれた愛馬に乗るより走った方が速かったですよ？」

「馬が気の毒だなあ」烏鷺は言う。「だから何度も言ってるけど、昔の君の力は『英雄』という肩書きに与えられた力で、世界から借りていただけ。本来の君の体が出せる力は、今の通り」

「そんな！　だって、あんな人達にも劣るなんて、そんなわけ……あるわけないじゃないですか！」

「あるわけなくとも、それが現実」

聞き分けのない元英雄に、烏鷺はストツプウオツチを印籠いんろうの
ように見せつける。

「今の君のタイムは8・75秒。スタートダツシユに失敗した
けど、その歳の平均値よりは速い。そこそこ、運動はできるん
だね。まあそこそこ。あはははは——うぐっ……」ビンタされ、
烏鷺はよろけた。

「ひどいことをするね」と睨にらみつける。

「あなたがひどい事ばかりするからでしょう！ 人の体好
き放題いじくったくせにしらばっくれて馬鹿にして、しまい
にや人をそこそこ呼ばわりつてふざけてんですかあなた！ ビ
ンタぐらいじゃ生ぬるいです！ 齒あ食いしばっ——

……」

と、カロンは唐突に地に膝をついた。ひー……ひー……と浅い呼吸を繰り返し、つり上げられた魚のように口をぱくぱくしている。

息も整わないうちに叫び過ぎたせいで、過呼吸の状態に陥ったようだ。精神的な疲労も要因の一つだろう。

「大丈夫だよ」烏鷺はそつとカロンの口元にハンカチを当ててる。「ゆっくり呼吸して、大丈夫だから」

背中をさすり、大丈夫だよ、と繰り返す。気丈に振る舞ってはいたが、ずっと不安だったのだろう。あたり前だ、全く別種の世界に勝手に引き戻されたのだから。

カロンは涙の浮いた目を烏鷺に向けろ。どうにかしてくれ、とすがりつく。英雄の時にはあり得なかつた身体異状がよつぽどこたえているようだ。

カロンはそれから3日ほど、ひどい熱を出して寝込んだ。精神の均衡が崩れると、肉体も壊れる。

「なんてもろい体……なんて……」とうわごとを繰り返すカロンの傍で、烏鷺はずっと水枕を取り替えていた。

「大丈夫だよ」と烏鷺は何度もカロンの頭を撫でた。

烏鷺の心の半分は、純粹にカロンを心配していた。

もう半分は、今そばにいれば信頼してもらえるだろうな、と

打算を働かせていた。

身長 176センチ

体重 54キロ

50メートル走 8・52秒（はかり直した）

ハンドボール投げ 15メートル

握力 29キロ

反復横跳び 42回

上体起こし 16回

烏鷺は自宅1階のベランダで、ふかふか煙草をふかしながら、カロンの身体・体力測定の結果を眺めていた。

「ちよつとだけ身体能力の高い、普通の女の子だね」

最初は呪いだなんだとわめいて叫んで烏鷺をなじったカロンも、最近はその現実を受け入れ始めている。自分には特別な力などないことを。

カロンが何かするたびいちいち数字を見せたのが効果的だったようだ。

計測と、比較。

全能感を持つ者から自信をはぎ取るのに、これほど有効な方法は無い。何しろ数字は誤魔化しがきかないし、勝負の場では相対的に自分の位置を思い知らされる。

「ここまではマニュアル通りかな。——っと」

プルルと携帯が鳴る。発信者は、見るまでもなかった。

「はい。何？」

『烏鷺、お腹がすいたんですけど』

「そう。お腹がすいたんだね。それはそれは。いちいち報告しなくてもいいんだよ」そう言って通話を切ると、すぐに再コールがかかる。

『烏鷺……お腹がすいたんですけど』

「だから、いちいち報告しなくていいって」
『つくりに来て下さいって言うてるんですうう！』

「あ、うん。最初からそう言えばいいのに」
『いえ、烏鷺は最初からわかってました！ わたしをからかっ
てるんです！』

烏鷺は通話を切り、口にくわえていた一本を吸い切ると、自
宅を出た。

街頭の少ない道は真っ暗闇で、星がよく見えそうだったが、
特にお空に興味はない。遠い遠い星よりも、煙草の方が価値が
ある。

お守りの前にもう一本、と昨日試しに買ったミント系の煙草

に火をつける。ぼう、と灯る光に周囲が照らされ、ひび割れだらけの道路が見える。

「順調、かな」

カロンを一般人にする計画は、今のところとどこお滞りなく進んでいる。カロンは今、やたらと烏鷺を呼びつけわがまま放題しているが、これも計画通りだ。わがままを言ってそばに置こうとするのは、烏鷺の事を『移行対象』とみなし始めた証拠だ。

少年少女の成長には、強い不安がつきまとう。だから子供はその不安を紛まぎらわすため、お気に入りよのシーツやぬいぐるみをそばべに置く。このような、子供達が寄よる辺べとするものを移行対

象と言う。

英雄にとっての移行対象とは、自らの圧倒的な力だ。体に纏まとう力こそ、彼らの不安を解消し、成長を補助する絶対的なパートナーなのだ。

例えば、単なるオタク少年であるアムロが勇ましくシヤアと闘えるのは、彼がモビルスーツという移行対象に乗り込み、その中で疑似的に大人として成長しているからだ。うじうじうざいシンジ君が、それでも使徒と闘えるのは、彼がエヴァという外殻がいかくに守られているからだ。圧倒的な移行対象は、精神を守るのみでなく、引き伸ばす事さえする。

だが、英雄は元英雄となり、力という移行対象を失った。自

分がもうただの一般人だと実感するたび、元英雄は不安になる。あの力はもうない。じゃあ、次は何が自分を守ってくれるのだろうか、と。

そんな元英雄達の新たな移行対象となるのが、担当官の役目の一つだ。

つまり、担当官とは――

「なーに煙草吸っていますか！」

後ろからドンと体当たりされ、烏鷺はよろけた。振り返ると、恨めしそうにこちらを睨むカロンの姿。

「おっそいなあとと思って呼びに出たら暢のんき気にぷーかぷか煙草吸っててもーご立腹ですよわたし！ わたしのご飯と煙草と

どつちが大事なんで——あーいえいえ答えなくてもいいですよー。どうせ氷みみたいな口調で『煙草』って答えるんでしよう？ はいはい、おちやめさんですわねー。さ、早く来て下さい！」

腕をぐいと引っ張られ、カロン宅まで連行される。

「さ、さ！ これを身につけるんです！ わたし専属のあなたに買ってあげましたよ！」

体に結びつけられたのは、ひまわり柄のエプロンだった。

「ふっふん。こんなに明るいエプロンつければ、その冷たい態度も少しは改善されるでしょうねえ」

「これはどうも。でもせっかくの支給金をこんなものに使わな

くてもいいんだよ。もつと、本とかCDとか」

「こんなものつてちよつと……！——いえ、怒っても無駄でしょうね。ふん……まあ腹に据えかねる態度ではありますが、おいしいお肉を焼いてくれたらチャラにします！ さあちやつちやつと焼いちゃって下さい！」

「あー、そのことなんだけど」

に——くに——とコールしてくる大変うざい元英雄に、烏鷺は一枚の紙を突きつけた。

「？　なんですかこれは？」

「この間の健康診断の結果。ほら、血とか抜かれてたでしょ？　検査の結果、君の血液は異常なコレステロール値を叩き出しま

した」

「それは、つまりどういう事ですか？」

「立派な、高脂血症です。血液が肉の脂でどろどろってこと。このままじゃ病気になる。」

——今日から魚と野菜しか出さないよ」

無情な宣告に、どんな敵も恐れなかった元英雄は「ひいっ……」と悲鳴を漏らした。

「しかしほんとにひどい数値だなあ……。コンビニとかで全力で買い食いしてたなこれ。……いやまて、なんでガンマ値までちよつとおかしいんだ。——まさかとは思うけど、酒、飲んでない？」

その瞬間に、カロンの視線がシンクの上の戸棚に泳いだのを、
烏鷺は見逃さなかつた。

「ここだな」

「あ、だめです……！」

制止を振り切り戸棚を開く。

カラコロガコンと落下してくる空き缶空き瓶は、すべてアル
コール飲料のものだった。

カロンの顔が青ざめる。「ああ……いやこれ、ええと、こ
れはあ……ですわえ、ええとお……」

「未成年が、よくもまあ、こんな」

ビール日本酒、甲類焼酎^{こうるいししょうちゅう}。どこの酒屋が売ったんだろう、

と烏鷺は田舎のモラルの無さに嘆息した。

「だ、だってですね！ わたし向こうの世界じゃうわばみでならしておりました！ ええ、飲み比べ食べ比べで負けた事なんて一度もありません！」

「だから、ね」すでに何百回とした説明を、今一度行う。「その食に関する能力も、君のものじゃない。『英雄』は豪胆ごうたんだからたくさん食べられるし、英雄は生活習慣病にかかったりしないから、それでも異常は出ない。

——でも、ここでは違う。この地球という世界は、どんな人物だろうと、自分がした事の結果に向き合わなくてはいけない。リターンからは逃れられない世界なんだよ。怠惰な生活をすれ

ば太るし、運動能力を失う。食べ過ぎれば、今君がそうであるように、健康に害が出る。君はもう、一般人だ」

烏鷺に気圧けおされ、カロンはじわじわ引いて行く。相手がモンスターなら飛びかかってやっつけてやるのに、と言わんばかりの表情をしているが、残念ながら現実という怪物は倒せない。選択できるコマンドは、『向き合う』と『逃避』の二つだけ。

「な、なんですか一体！ わたしはだって、みんなから尊敬される存在で！ こんな小さい事、いちいち考えてられないうんです！」

カロンは叫ぶ。どうやら逃避を選んだらしい。

「あーだうーだ言って、数字ばかり見せて！ そんなにわた

しをいじめたいんですね！もーいいですよ、そんなにわたしが嫌いなら——」

「違う」カロンの小さい顔を両手で包む。「押しつけがましいと感じるかもしれないけれど、僕は君の体が心配だからやっつてやる。このままじゃあ君は、ぶくぶく太って醜くなつて病気になる。なつて、みじめに死ぬ。」

今までいったい何人の元英雄が、適応できずにひどい最期を遂げたか——」

「あ、ええと……烏鷺、ご、ごめんな——あうツ」

「せっかく綺麗な肌なのに、ほらにきび。それに全体的に脂っぽい」両の親指で、カロンの肌を撫でる。「白目は……ああ、

大丈夫だね」

「あああああの、烏鷺……」

「うーん、でもちよつと不健康かな。リンパは——」

そうつと両手を耳の後ろに持っていき、首の脇まで下ろす。

「う、ろ……」

カロンは息を止め、ふるふる震える。初めての感覚が何が何だかわからず、混乱しているようだ。頬に朱のさすカロンと対照的に、烏鷺の心は冷えていた。自分の行為の効果を自覚し、観察している。

担当官とは、要するに詐欺師だ。

不安で不安で仕方のない相手の心につけ込み、思うように動かす極悪人だ。

いやジゴロかな、と烏鷺は胸の奥で自嘲の笑みを浮かべた。

7

魚と煮物の健康的な料理をつくって、烏鷺はカロン宅を後にした。自宅に入る前に、煙草に火をつけ一服。

「怖いくらいだ」ぽつり、呟く。

あまりに順調過ぎる。たしかに健康診断の結果は芳かんばしくなかつたが、若いからリカバリーはきくだろう。カロンに現実の

厳しさを実感させることができたとさえ思えば安いもの。今まで担当してきた元英雄は、この時期ストレスがピークになって、もつと過激な問題を起こしたものだ。

「英雄としての格が高いからかな」

カロンは今まで烏鷺の担当してきた元英雄達の中でも特に格の高い英雄だ。だから、逆に扱いやすいのかもしれない。

異世界を救った存在を、烏鷺達は一樣に『英雄』と呼ぶが、英雄にもいろいろある。

先頭に立ち、冒険や戦争を主導する『主人公』タイプの英雄。その補助を行う『助力者』。

主人公達に移動手段などを渡す『贈与者』。

主人公達を仲間達や試練と出逢わせ、物語を起動させる『マクガフィン』。

今まで烏鷺が担当してきたのは主に『贈与者』『助力者』タイプの元英雄達で、カロンは初めての『主人公』だった。一般的に、『主人公』は人格が苛烈かれつで扱いにくいとされている。しかしカロンには情もあるし、地球的な道德の観念も全く消えていない。端的に言って、やりやすい。ちよつとアホで空気が読めないけれど、あれは普通の子だ。

「簡単な仕事だね」

烏鷺は煙草を携帯灰皿に押し込み、自宅のドアを——開けた瞬間に、異変に気づいた。

バスルームから、シャワーの音が聞こえる。水を出しっぱなしにした覚えはないし、そもそも今日はまだシャワーを浴びていない。

「……」

腰から炭素鋼のナイフを引き抜き、迅速に駆ける。扉を開き、脱衣所へ。そしてバスルームの扉を——「はあい♪」

「……」

見慣れた女性の顔が扉の隙間から出てきて、烏鷺は動きを止めた。姿勢を正し、頭を下げる。「お久しぶりです。行方不明だと聞いていたけど」

「旅行に出ただけよ。誰にも行方を告げずにね」

「それを世間では失踪と言うね。で、なにしにここへ？」

あら、と心外そうに彼女は言う。「おちびちゃんが仕事をし
てると聞いたから、泊まりにきてあげたのよ」

「押しつけがましいね」

鍵はどうしたのだろう。ピッキングできる鍵穴ではないのだ
が——考えても無駄な事なので、考えない事にした。

濡れた金髪のはりつく裸の肩。うっすらとバスルームの扉に
浮かぶからだ軀は彫刻のように美しく、無駄がない。

もう40は過ぎているはずなのだが、この化け物には年齢など
関係ないのだろう。退役英雄日常回帰補助機関日本支部顧問、
通称アリス。

「本当に、遊びにきただけ？」烏鷺は目を眇める。

「そうね、主たる理由はそれだけ——」おいでおいでをされたので、烏鷺は素直に近づく。命の危険を感じたが、この人に逆らう事はできない。

見開いた青い眼で、アリスは烏鷺を見据える。「烏鷺、死ぬぞお前」

男のように低い声音こわねで、烏鷺は死を宣告された。

「へえ。いつからアリスは占い師に転職したのかな？」

「我々など、皆占い師のようなものだ。ありもしない未来をあるといい、自分の言う通りにすれば幸せになれると相手にす刷り込む。

——烏鷺、お前、英雄を甘く見てはいけないよ」

「カロンの事を言ってるの？　そう危険な相手とも思えないけど」

「いや、あの子は適応力が高いだけだ。この世界に来た瞬間に適応し、人好きのする人格をつくったんだ。

彼女は今までお前が担当してきた海千山千のもどきとは違う。正真正銘の英雄だ。ある世界の不安を打破し、新たな秩序をもたらしした者。同じ生き物だと思わない方がいい」

「カロンは英雄だった存在であって、もう英雄じゃない。力はないんだから、もう一般人だよ」

「そうねえ」困ったように笑いながら、アリスは声音と口調を

戻した。「もう力はない。でもね、『英雄』はそう簡単に消えはしない。烏鷺、あなた猫を飼った事はある？」

「ないけど」

「猫はね、とでも人になつきやすい。かわいがれば、とにかく人に甘えるようになる。かわいく、かわいく。」

——でも、突然野生に帰る瞬間がある」

「……………」

「たった今まで膝でくつろいでいた猫が、突然飼い主に襲いかかるの。息を潜めていた『野生』が、時たま蘇るんですって」

アリスはそう言うと、ガラツと扉を開け堂々と裸体をさらした。照れた少女のように軀を隠しているより、そうしている方

がよほど彼女らしい。

「気をつけなさい。『英雄』はどんなところでも死なないのだから」

だから、英雄というのよ。

8

「烏鷺、おかしいですねえ。わたしはあなたにラーメンをおごって頂けると聞いて出てきたわけですが。わけですが！ どうして段ボールを運んでいるんですかねえ！ わたしの聞き間違いですかねえ！」

「聞き間違い？　違うよ、僕が嘘をついただけだ」

「んな事わかってるんですけどねえ！」

重たい段ボールを籠かごに入れ、烏鷺とカロンは夜道を自転車で併走していた。カロンは3日前に自転車の乗り方を覚えたばかりなのだが、危なげなくついてくる。運動神経はいいらしい。

「さ、ついたよ」烏鷺は自転車を止めた。

そこは市営団地の敷地で、5階建てのぼろっちい建造物が幾多とそびえ立っていた。

「烏鷺、ここに敵が？」

「いないね」一蹴し、烏鷺は段ボールを開いた。「今日は、これを配ってもらおう」

「なんですかこれ」

カロンが手にしたそれは、何の変哲もない不動産屋のちらしだ。一つの箱に400枚ほど詰め込まれている。

「今日は、ポステイングのバイトをやってもらいます。ちらし配り。ちゃんと給料も出るよ」

「しれっと進めています。が烏鷺！ わたしはですね、あなたにラーメンを！ ラーメンをおごって頂けると……！ 健康診断

以来あなたに脂を断たれ ひょうろう兵糧攻めにも等しい責め苦を受けて

きたわたしがどれほど喜び勇んで家を出たか考えた事がありましたか！ ええないでしょうね冷酷非道なあなたには！ あなた

には！ わたしが買い食いできないように支給額を減らした畜

生なあなたには！」

「ずいぶん難しい言葉がすらすら出てくるようになったなあ。一生懸命勉強していた成果だね。素晴らしい、さすが元英雄」

「いやね、わたしもね、気付いてましたよ、自分ができる子だって。あとね、褒めて誤魔化そうとしないで下さいね、ばれだつっつーね」

「この仕事の報酬は配布枚数×2円。一つの棟を配り終わったらこの紙に配布枚数を記入して」

「ラーメン」

「それじゃあ、まずは僕と一緒にやろう」

「ラーメン」

「ちなみに、このお金の使い道に関しては特に制限を設けるつもりはないから、また買い食いができるようになる」

「ラーメン」

今日のカロンは随分と頑なだった。最近の食事制限がよほどこたえていたのだろう。しかたない、奥の手を出すか。

「ちなみに関係ないけど、昨日美味おいしいのどぐろを注文しておいた。煮付けにしても塩焼きにしても美味しそうだったなあ」

「のどぐろってたしか高級魚じゃないですか何ですか買収のつもりですかいくら最近安い鯖さばばかり食べさせられてうんざりしてるからって魚ごときでわたしが動くだけでもええ動きますよ畜生！」

「よかった、じゃあ早速始めようか」

80枚ぐらいのちらしの束を、片手で軽く折り曲げて持つ。折り目の内側の空間に人差し指を差し入れ、一枚を引っ張り出し、^{つま}摘む。そして人差し指で郵便受けの蓋をはじくようにして、勢いよくちらしを差し入れる。

カタン、と蓋の音が薄暗い空間に響いた。

「じゃ、やってみて」

「はい……」

最初はあたふた苦戦していたカロンであるが、すぐにこつをつかんだようで、みるみるちらしが減っていく。

「くはあー！ 終わりましたよ！ のどぐるろ！ のどぐるろ！
それよりも先にお金下さい！ 今までの鬱憤うっぶんをはらすように
買っちゃいますからねわたし！ 唐揚げ肉まんおにぎり、それ
から——」

解放感に満ちあふれたカロンは一直線にコンビニへと向かう。
「到着！」 自転車に鍵もかけず、ひらひらひらりと店内に。

元英雄は、ついに惣菜そうざいコーナーにたどり着いた。かつてのカ
ロンならば、値段も見ずに自分の愛する惣菜達を次々籠に放り
込んでいただろう。しかし、今は——

「398円ですか……ううむ」

値段をいちいち確認し、顔をしかめる。

きつとカロンは今、こう考えているのだろう。『400円、つまりちらし200枚分だ』と。自分の200枚分の労働と、この商品は釣りあうのか——お金の出る労働を体験した事で、金銭感覚を獲得したのだ。

人は、稼いだ金以外を大事に使う事はできない。今自分が手にしている金が、どれほどの労働によって得た金か、という実感が、人に金の使い道を真剣に考えさせるのだ。

金づかいの荒い人でも、一度仕事を経験すれば金銭感覚はかなり改善される（生来の性質にもよるが）。特にポスティングのような、労働量が金額にダイレクトに反映されるような仕事

は矯正きょうせいにうつてつけだ。

「ねえ」と烏鷺は悩み続けるカロンの言う。「お腹空いてるかもしれないけど、ここではおにぎり一つぐらいにしといたらどうだろう。そのほうが、のどぐるも美味しく食べられるし」

「ううん……そうですね、ええ、そういう考えもありますけど」
ちら、とカロンは烏鷺を見る。「あの、烏鷺……」

「ん？」

「あのですね、いやあの、今日は烏鷺も一緒に夕飯どうでしょう。つくらせるだけつくらせて、わたしだけ食べるって、なんかしつくりこないんですよね。まあ烏鷺が嫌なら別にいいですが……わたしも口うるさい烏鷺とそこまで一緒にしたいわけも

ないですし、ええ全然」

「うん、そうだね。じゃあ今日から一緒に食べようか」

問題ないよアリス、と烏鷺は頬に朱のさすカロンの顔を横目で眺めながら煙草をくわえる。

大丈夫、カロンはもうすぐ一般人になる。英雄なんて経歴は、10年後には本人も忘れているだろう。

10

「転校先、決めといたよ」

テイツシユ買ったよ、とでも言うような、極さりげない口調で烏鷺は言った。

「テンコーサキ……？ ええと、人名でしたっけ？」

「そんなマジシャンみたいな名前の知り合いはいないよ」煙草を一本取り出し、くわえる。「学校に行くってこと。カロンは東京からの転校生として、近所の高校に入ってもらいます」

「コーコー……」実感は、まるでわからないようだった。「コーコー……」

「鳴き声みたいだね。あはは、コーコー。かわいい」

「かわいい……」カロンの顔が真っ赤に染まる。「そんな事よりですね、烏鷺」ボフ、とカロンは畳んだばかりの洗濯物を叩

く。「学校つてのが、わたしにはわかんないんですが……いえいえ、どんなものかはわかりますよ、研修とか受けましたし。でもわかんないんですよ、あれなにしに行くところなんですかねえ？」

「勉強をするところ、って事にはなってるね」

「する気ないです」

「さすがしいなあ」煙草を灰皿に押しつけながら、烏鷺は笑う。「でも、行かなくちゃいけない。高校卒業の経歴は今後必要になる」

「経歴って何に必要なんですか？」

「職につくため」

「だったら必要ないじゃないですか！ わたしの手にはすでに職がありますから！ ポステイングスタッフとしての職が、もうばっちりですよ！」

「ん？ あれで生活するのは無理だ」

「出ましたー、はい出ましたよー。烏鷺の『無理だ』が。烏鷺はわたしの根性をあまく見ていますね。わたしの手にかかればお金ぐらいもうがつぽがつぽですよ。一流ポスターとして名を馳せます！」

「ポステイングスタッフの事をポスターとは言わないんじゃないかな」煙草をもう一本。「いくら頑張ったところで、ポステイングスタッフで稼げるのは月に3、4万ってところ」

「むう……少ないですね。でもですね、節約すればなんとかか」
「無理。人が生きるのってすごくお金がかかる。例えば、今君が住んでるここ、普通に借りれば家賃は6万5000円くらい。青森とはいえ一軒家だしね」

「6ま……！」

「安いアパート探したって、家賃3、4万は飛んでいく。それから水道光熱費で1万、あと保険料と受信料と——とにかく、生きるにはお金がかかる。だからちゃんとした仕事につかなくちゃいけない。仕事につくためには、高卒の経歴がないとかなり厳しい」

「でも……うー……でもですね。そんな不純な動機で」

「不純でいい。経歴なんて、お金みたいなものだよ。お金だつて、それ自体はただの紙と金属でしかない。だけど、それさえあれば自分の好きなものを買うことができる。理想の未来のために、経歴を稼いでくると考えればいい」

「理想……未来……」

「ちなみに、僕も一緒に転校する」

「う、烏鷺もですか……？　お、おう、なら……」

11

24にもなつて、学生服に袖を通すとは思わなかった。童顔な

ので違和感はなかったが、それがまた、と烏鷺はトイレの鏡の前でため息をついた。

一応は校則で禁止されている携帯をポケットから取り出し、メールを作成。

『本日のカロンも順調に学校生活を送っている様子』

宛先は眼鏡。すぐに返信が来た。

『報告書の作成に必要なので、セーラー服姿の写真を求む』

絶対君が欲しいだけだろう、と心の中でつつこみながら、烏鷺はトイレを出た。自分のクラスに戻る前に、さりげなく隣の教室をのぞく。

「うっしやー！　できましたよ！　わたしが一番！」

カロンの拳を突き上げ、なにやら騒いでいた。どうやら級友達とカードゲームをしていたらしい。

しばらく烏鷺としか会話していなかったので心配していたのだが、さすがに英雄していただいただけあって、コミュ力は高い。友達たくさんだ。

烏鷺とカロンはクラスが別れているので、様子を逐一ちくいち観察する事はできないが、漏れ伝わる噂によれば、人気者としてやれているらしい。

「ま、兄貴の方は変人呼ばわりされてるようだけど」

カロンの兄こと烏鷺は、転校二〇日が経っても友達の一人もなく、昼休みがくるたび学校内をうろちよろしていた。別に人

を遠ざけてるわけじゃないんだけどな、と烏鷺は首を傾げる。まあ、害がないのでよしとしよう。

「どこで一服しよっかな」

ぷかーっと紫煙を吐き出しながら、烏鷺は報告書を埋めて行く。電子に弱いたちなので昔ながらの紙とペンだが、全く不自由はしていない。

「全部順調、かな」

カロンの支出額は減少傾向にあり、そして自意識も縮小を続けている。傍目にはもう、普通の女子高生と変わりない。ちよつと変だけど、まあ珍獣枠ということの一つ。

「10日ってところかな」

あと10日で、烏鷺はカロンの手綱たづなをはなそうと考えていた。

カロンは順調に一般人にとけ込んでる。もう、烏鷺がいなくたって問題ないくらいだろう。

そんなカロンにとって、今もつとも不要なものは——烏鷺に他ならない。

10日かけて、少しずつ距離を置いていき、カロンの烏鷺への依存を解く。最初は寂しいかもしれないが、学校でうまくやれているなら、いずれはその欠落を友達で埋めるだろう。彼氏だって、すぐにできる。あんなに綺麗なのだからよりどりみどりだ。家事は心配だが、必要に迫られればすぐに覚えるだろう。

カロンは馬鹿でもなま忘れ者でもない。

「また、一人」救った。

烏鷺はふふ、つと笑う。

カロンと離れる事が寂しくないとさえ嘘になる。2カ月近くを一緒に過ごしたのだ、情は多少移っている。離れる時はけっこうな痛みを感じるだろう。毎回そうだ。

でも、それ以上に喜びがある。自分はまた一人を救ったのだという実感が、烏鷺に痛み以上の喜びをもたらししてくれる。

あと10日の短い期間を、忘れないようにしておこう。

—— 『英雄』はそう簡単には死なない

アリスの不吉な忠告が頭に響いたが、気にしない事にした。

（「英雄」解体 第一話／おわり）